



第1回仙台市子ども読書活動推進計画（第四次）検討委員会議事録

- 日時 令和5年6月20日（火）10:00～12:00
- 場所 仙台市役所上杉分庁舎12階教育局第1会議室
- 出席委員 猪野力委員，児玉忠委員，齋藤千里委員，佐藤のりみ委員，佐藤真弓委員，鈴木知子委員，多田知子委員，渡邊千恵子委員
- 事務局職員 福田教育長，柴田生涯学習部長，田村生涯学習課長，千葉市民図書館副館長，林こども家庭保健課母子保健係長，三澤生涯学習課企画係長，横山生涯学習支援センター事業係長，教育指導課教育課程係 猪又指導主事，市民図書館奉仕整理係 浅野主査，生涯学習課企画係 松澤主事

○会議の概要

- 1 開会
- 2 教育長挨拶
- 3 委員紹介
- 4 事務局職員紹介
- 5 委員長及び副委員長の選出について

仙台市子ども読書活動推進計画（第四次）検討委員会設置要綱第4条第1項に則り，委員長及び副委員長の選出を行った。委員長には渡邊委員を，副委員長には児玉委員をとの推薦があり，全会に承認された。

- 6 会議の運営について

附属機関等の設置及び運営の基準に関する要綱第4条に則り，原則として会議を公開することとし，非公開とすべき理由がある場合には，必要に応じて手続きをとることとした。議事録については，委員長と，委員長が名簿の順に指名する委員が署名することとした。

- 7 子ども読書活動推進計画（第四次）策定について

子ども読書活動推進計画（第四次）策定にあたり，現行計画における取組状況や国，県の計画の内容等について資料に基づき事務局より説明し，質疑応答と読書に関して意見交換を行った。

渡邊委員長 ただいまの説明について，ご質問等があればお願いしたい。

猪野委員 資料5などから小学生の不読率が中学生に比して非常に低いことが読み取れるが，どのような理由が考えられるか。学校が読む機会を与えているのか。

生涯学習課 仙台市だけではなく全国的な傾向かと思うが，未就学児や小学校低学年の時期は比較的絵本等を読む環境にあるものとする。学年が上がるにつれ，勉強と同じように内容も難しくなり，また部活や受験勉強等が始まることで読書から離れていくようになるのではないかと考える。

鈴木委員 小学校の現状として，毎週1～2回程度，朝の10分間に読書する時間を設けている学校がほとんどであると思う。また，1年生から4

年生までは週に1回程度図書室を利用する時間を設けているところも多く、さらに国語科の学習として本を使った調べ学習を行う場合もある。これらを鑑みると、不読率3%は特段低い数字ではないと考える。

児玉副委員長 大前提として小学生のうちは本がまだ面白いが、中高生になると他にもっと面白いものができてしまう。加えて、朝読書や授業の一環で本を読む機会も多いことから、小学生の不読率は相対的に低くなるものと考えられる。

猪野委員 逆をいえば、中学校では読む機会がないということになるか。

多田委員 1年生では朝読書を行うが、2、3年生になると朝学習に変わる学校もあり、一冊も読まないという状況も出てくるかと思う。

児玉副委員長 中学校においては本が面白くないこと、学校でのサポートが難しいことという二重の問題があると思う。

渡邊委員長 中学校にも調べ学習はあるのではないか。

多田委員 調べ学習では主にChromebookを使用している。大規模校では、本を使った調べ学習をしようとしても、図書室の利用時間をどのように各クラスに割り振るのかという問題があり、調整が難しい現状にある。

渡邊委員長 話題が逸れるが、仙台市立図書館においても電子図書等の貸出が行われ、小中学生も借りられるようになっているかと思う。

市民図書館 学校教育の場で手軽にせんだい電子図書館を利用できるよう、昨年6月に仙台市立学校に対して特別利用IDを発行した。各校の児童生徒の10%程度の数を発行しており、電子書籍や調べ学習に活用できる資料を読むことができる。

児玉副委員長 大枠の話になるが、当委員会と仙台市図書館協議会との違いはどのように整理されているのか確認したい。

生涯学習部 当委員会で協議していく子ども読書活動推進計画については、家庭、地域、学校、図書館という四つに代表される場に焦点を当てているという点が特徴である。市の組織においても、それぞれを所管する部署において取り組みが行われており、部署間の連携が重要となる。また、仙台市図書館振興計画と子ども読書活動推進計画との棲み分けという点では、前者は市立図書館を中心とし、全世代を対象とした読書活動推進について策定したものであるのに対し、後者は、読書活動の推進のなかでも子どもに特化した取り組みを行っていくという「子どもの読書活動の推進に関する法律」を受けて策定するものであり、

家庭や学校、図書館、児童館、保育所といった子どもに関わるあらゆる現場において推進するため、横串を刺した視点のものである。

佐藤眞弓
委員

こども園での様子を見ていると、両親の過ごし方の子どもに与える影響が非常に大きいと実感する。「家読」という両親と一緒に本を読む、あるいは両親が本を読む姿が隣にあるという取り組みはとてもよいことと思う。

市民図書館

「家読」に関する仙台市図書館の取り組みとしては、各年代や学年を対象に本を選び、展示などを行っている。

鈴木委員

小学校現場では、親子で同じ本を読んだり、違う本であっても、時間を合わせて読書したりする取り組みを推進している。令和3年度の学校図書館運営モデル校では、旭丘小学校や大沢小学校などの取り組みが挙げられるかと思う。ただ、保護者の方も仕事が忙しく、また本よりもスマートフォンという傾向にある中で家読を推進していくのはなかなかハードルが高いものとする。

児玉副委員長

強制力がなく、学校ではあくまでも推奨することしかできないため、質を高めていくのは難しい面がある。

渡邊委員長

ワークライフバランスの問題に行き着くのかかもしれない。家読の取り組みについては家庭への支援、大人への支援という視点で考える必要があるかと思う。また、さまざまな家庭がある中で、学校、地域など読書が推進される環境を子どもたちに与えることが重要であり、まさにすべての子どもに目を向け、横串を刺すためにこの委員会があるものとする。

それでは、今後の計画策定に向けて委員の皆さんより、計画に対するご意見や、読書に関してのお考えなどを広く頂戴したい。

猪野委員

偉人の本に影響を受け、誇りや自信を持って人生を歩んだり、心の芯になったりすることがあるかと思う。読書活動を推進するにあたり、子どもに自由に本を選んでもらうのか、あるいは特定の内容を薦めるのかということに興味がある。例えば仙台だと林子平や高橋是清といった地域にゆかりのある人物や、地域を限らずとも社会に影響を与えた人物の生涯を学ぶことが、子どもたちの将来を良い方向に導くのではないかと考える。

齋藤委員

ボランティア団体「ランプ」では、小中学校からの要望を受けてブックトークを行っており、昨年の実績は44回だった。実際に行ってみると、「さっきのお話の続きはどうなっているの」ときかれるなど、非常に子どもたちの反応がよい。子どもたちに特に読んでほしい本を、楽しく紹介するということが大切であるかと思う。また、学校の担任の先生から本について話すといったことも、子どもたちの本への関心を高めるという点で大きな効果があると実感している。

また、学校図書室開放にも関わっているが、常連がついていたり、指導員とコミュニケーションをとる子もいたり、子ども、大人問わず居場所として機能している部分もあると思う。鍵の管理が指導員の負担となっており、そのあたりを解消できれば指導員の確保や実施校の拡大につながるのではないかと考える。休日であっても図書室の本に触れる機会があるということは、読書の推進に有効であると考えている。

それから家読に関して、取り組み自体はとてもよいものだが、現状として家庭に本が無い子が多くなっている。図書館を利用しようにも、地理的な問題などがあり、低学年であれば自分で買うのも難しいため、学校の図書室の充実が非常に重要であると考えている。また、親が本を読まない家庭では子どもも読まない傾向にある。家庭、学校、地域、図書館さまざまな方向から読書の楽しさを知ってもらい、広げていく必要があると考える。結果として、逆に子どもから親へと読書の楽しさが伝わるようなことがあってもよいし、電子図書であってもよい。少しでも楽しさを知ってもらうことがきっかけとなるものと考えている。

佐藤のりみ
委員

皆さんからお話があったように、本を使った調べ学習や、図書館に行く体験を含め、読書に関する体験が重要であると考えている。読書体験の楽しさがさまざまな方向から発信されるとよい。感想のやりとりであったり、先生に本を薦めてもらったり、あるいは本に出てくる料理が給食で出てきたり、図書館に泊まったりなど、黙って読むに留まらない、一歩踏み出した体験ができるとうよいと考える。

佐藤真弓
委員

子どもが読書に関心をもつ基盤には、乳幼児期の体験が深く影響するものと考えている。両親の膝の上など、情緒が安定した環境で本に親しむ時間が、その先の本への興味や読みたいという意欲を育む。中には、どのように子どもに本を読むべきかわからないなど、つまずきや戸惑いを抱えている保護者も見かけるため、声をかける場合もある。子どもの読書活動に関して、こうした基盤づくりを大切にしていきたいと考えている。

鈴木委員

小学校で子どもたちと接していて実感するのは、担任が本好きであれば子どもたちも図書館に足を運ぶ傾向にあるということである。教員から児童に働きかけていくというのは、実行しやすく、かつ効果的な方法と考える。同時に、家族が本好きであれば、子どもたちもより本を手取る機会が増えるだろうから、何らかの形で家庭にも働きかけることができると考える。また、仙台市図書館と連携できて助かっているが、利用可能なサービスについての情報が若年層の教員に浸透していない部分があり、学校内の情報共有が必要だと考える。

学校の図書室は児童の心の拠り所、居場所になっていると感じる。学校図書事務員の方にはさまざまご協力をいただいているが、勤務時間の短さが難点である。朝早い時間や放課後にも図書室が開いていれば、早く登校した児童や高学年の児童が利用しやすいと考える。

多田委員

小学校では本を読んでも、中学校に上がると部活や塾、受験、行事などで読書の時間をとることが難しくなるというケースをよく見かける。改善のため、例えばPTAの会報誌で先生のおすすめの一冊を紹介したり、図書委員会でその理由をインタビューしたりといった取り組みを考えている。先生からのおすすめや、教科書でおすすめされている本は生徒の興味を引きやすい。ブックトークの説明で映画の予告編のようにとの話があったように、工夫しながら働きかけていく必要があると考える。委員の皆さんのさまざまなお話を聞いて、まだできることがあるのではないかと思えたため、参考にしながら取り組んでいきたいと考える。

児玉副委員長

親や教員が本を読まない子どもも読まない、逆もまた然りという事実をみると、やはり言葉は人からしか学べないのだと考える。幼児期の両親の膝の上での読書体験についても、人から人へとつながるから有効なのだと思う。したがって、子どもの読書活動の問題というのは、親、教員をはじめとした大人の問題でもあるという共通認識を持ち、大人と子どものコミュニティをどのように再生するのかというところを一つの軸としてはどうかと考える。

渡邊委員長

コミュニティの再生について、家庭や地域、あるいは若者同士のつながりなど、各々思い当たるところがあるかと思う。例えば「子ども〇〇会議」など小学校高学年から中学生、高校生の若年層が主体的に考え、発信するコミュニティをつくり、彼らのアイデアの実現をサポートすることで、我々が外から考えるものとは違った実効性のある取り組みが生まれるかもしれない。この計画は子どもをはじめとして子どもに関わる全ての人へ向けて策定するものだが、推進していくために先に挙げた層と、もう一つはやはり子育て世代に焦点を当てることが有効であると考え。一見時間がかかるようだが、子育て世代、またこれから子育て世代となる若者に向けて働きかけていくのが近道なのではないか。委員の皆さんの問題意識や危機感を反映できるよう、基礎となる計画とそれを実現するための具体的取り組みといった階層を行き来しつつ、若者の力を信じて計画をつくっていくのがよいと考える。

児玉副委員長

例えば「仙台市読書会議」、「小学校教員読書会議」などと名付け、夢のようなことであってもとりあえず提案してみる。そしてその実現に向けて動いていくということができれば面白いかもしれない。

渡邊委員長

ゼロからということではなく、既に仙台市の図書館で、いわゆるYA（ヤングアダルト）と呼ばれる若者たちの活動が行われているので、それを発展させていくのがよいと考える。

各々の立場からお考えを伺ったが、この場で伝えきれなかったことや後で資料を確認して気が付くこともあると思う。さらなるご意見等は事務局にお寄せいただきたい。

8 その他

事務局より、骨子案作成に向けた第四次計画への意見提出や今後の進め方について説明。

9 閉会

令和 5 年 8 月 18 日

委員長 (署名欄) 渡邊 千恵子

署名委員 (署名欄) 猪野 力